

別子開坑二百五十年史話

平成23年9月17日(土)10:00~11:30

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

1. はじめに

別子銅山記念図書館が別子銅山開坑三百年を記念して住友グループが約20億円で建設して、新居浜市に寄贈した経緯からしても、また新居浜市の郷土の歴史のメイン・テーマが別子銅山及び別子銅山産業遺産であり、別子銅山の産業遺産は、世界的に知られた鉱山の遺産、我が国の産業革命を物語る遺産、環境問題を100年先取りした遺産などであり、さらに新居浜市の第五次長期総合計画のサブ・タイトルが、「あかがねのまち、笑顔輝く」からしても、別子銅山の歴史を学習することは必須である。

2. 本の構成

—目次—

—内容—

〈前記〉	銅山峰に立ちて 開坑以前	別子前進への所感 銅商・銅山師としての泉屋
〈開坑〉	別子山見立 出願・準備 採鉱・製銅	別子銅山の踏査 開発に着手 別子型鉱床での採鉱・製錬方法
〈稼業〉	立川縁起 未曾有の凶災 境界・道路・その他 英主の経輸 大別子実現 産銅漸減とその原因 別子坑間の排水 天明、文政、天保の大湧水 御用銅と幕末の衰相 隠密入山、諸方逼塞 ^{ひっそく} 大危機に直面す	嶺北の立川銅山 火と水の大試練 境界争いと運搬路の確保 御用銅山として存在の重きを築く 立川銅山の併合 遠町深舗 排水作業 排水坑の掘削 国産銅の九割は輸出、主力の別子も稼業難 幕府が重大関心の証 幕府の財政難・給米の高騰そして皇政復古
〈更新〉	絶大の危機を凌ぐ 更始一新の意義と施設 別子銅山の近代鉱業化	広瀬の銅業継続運動 別子第一の根本方針 銅山の雄・広瀬の着目 ダイナマイト、蒸気機関等の使用

<p>〈発展〉 湿式収銅及び製鉄 山上より新居浜へ</p> <p>新居浜より四阪島へ 銅鉱業の近代科学化</p> <p>煙害及び「煙害問題」</p> <p>中和施設</p> <p>二百五十年を迎ふ</p>	<p>コワニー視察、ルイ・ラロック目論見書 日本人による近代化の実行 山根製錬所での新事業展開 第二通洞、第三通洞・鉄道 別子大水害で拠点を山から浜へ 煙害問題で四阪島に移転 日浦通洞・第四通洞・大堅坑・ 端出場水発・星越選鉱場(浮遊選鉱) 電練工場・海底ケーブル 損害弁償額以上でも施設する 大煙突・6本煙突・大煙突、 科学力による農鉱併進 世界最高水準の中和工場(約二百万円) 煙害、煙害問題も完全解決 東亜第二の発展都市—新居浜の素描 250年祝賀</p>
--	---

3. 郷土史のネタ本

年鑑・新居浜(昭和32年版)—別子銅山

新居浜—史蹟と名勝—別子銅山 (昭和36年) 合田正良

新居浜市史—別子銅山 (昭和37年) 新居浜市

※ 坊ちゃん書房(松山市)にて5千円で入手。その後も神田古書まつり、インターネットで入手したが、人にあげた。古書店の店頭では手に入らない本。

※ インターネットの相場は4,000～6,000円。最高12,000円
古書店の項で探すと安価である。2,000円、3,000円でもある。
アマゾンが高価である

4. 切り上り長兵衛での書き始めは、「別子開坑二百五十年史話」を引用

旧別子銅山案内 (昭和44年)	新居浜山岳協会・銅山峰ヒュッテ
あかがねの峰 (昭和56年)	伊藤玉男
住友王国 (昭和57年)	邦光史郎
別子開坑記 (昭和61年)	芥川三平
別子銅山物語 (平成2年)	芥川三平 この年は開坑300年
「明治期」の別子そして住友 (平成5年)	藤本鉄雄

※ 史話とことわっていても、いつの間にか長兵衛が歴史上の第一発見者として思いこまれている。長兵衛が吉岡銅山へ別子山の露頭を通報した記録はあるが、時間の経過とともに、発刊後の50年間の発見記は史話が歴史的事実そのものように錯覚されてきた。小説的筆法は歴史的資料を使って時代を反映するが資料収集が不十分で史実ではない部分もある。作者の知っている範囲での読者を意識した描き方である。

長兵衛は吉岡銅山の近くの白石銅山で働いていた。露頭発見から2年間誰にも言っていない。長兵衛の露頭発見のいきさつが史料では特定できていない。

別子銅山を通史的に初めて書かれたもの。これまでに書かれた幾多の本のベースとなった本なので、読んでいないとそれらの本が読めない。

5. 昭和15年はどんな年

別子開坑250年

皇紀2600年(やがて太平洋戦争に突入)

四阪島煙害問題解決の翌年(開坑250年を節目として取り組んだと考える)

別子開坑二百五十年史話刊行の前年

6. 本の意図

泰西の列強国に対抗した近代国家意識の高揚と近代化及び煙害解決等での技術水準の高さを誇る。

ただし、環境問題としての煙害克服、山林緑化には言及していない。時代的評価は後になる。

7. 小文字部分の説明文

別子銅山開坑前史(P103)

四阪島の地名のヒント(P408)

8. 戦前で終了

閉山までの33年間と別子鉱山正史は、別子鉱山史の平成3年の刊行を待つ。

(切り上り長兵衛は登場しない)

平成9年に末岡照啓が広瀬歴史記念館の名誉館長に就任して、住友史料館の一次資料に基づく史実が伝えられるようになった。それまでは郷土史家が負う。

9. 参考文献

日本経済新聞「住友財閥」の巻末の参考文献が網羅されている。

10. 読み直しで目を引いた箇所

11. おわりに

個人的には40年間で別子銅山関係の書籍を約140冊収集した。しかし、別子銅山記念図書館を利用すれば直ちに全部が読める。ただし、郷土、歴史、産業遺産、金属、鉄道、歌謡、児童、地域、住友関係に分散しているので、今回、別子銅山関係として単独のコーナーを設置。

あわよくば、別子銅山記念図書館で佐渡金銀山、石見銀山、生野銀山等々の国内の鉱山について比較研究できるようになればと期待している。

とりあえず別子銅山史の古典として読んでください。

今年度の予定 11月12日(土) 10:00~11:30 幽翁

2月18日(土) 10:00~11:30 別子鉱山目論見書1部・2部

読み直しで目を引いた箇所

家長題辞

詳知源委

(別子銅山の) 始まりから終わりまでを詳しく知る。

開坑から現今まで(首尾、本末)

※源 流れの始まる所(崖から水がしみ出す)

委 流れの集まる所(姿勢を低くして舞う、人名に^{すま}季子あり)

今の歓喜・歓東坑口の写真 別子山村村長だった和田秋廣たちが、戦後に青年団活動として歓喜・歓東の坑口を復元した。平成13年の四留め坑口に復元する前の合掌型の坑口のモデル。

旧別子銅山跡の地図 別子越は今の銅山越

<前記>

P001 凡例 「当初、本社はこれが正史を修定せしむとする意図を有していたが、そのあまりに専門に渉らむことを顧ひ之を他日に譲り、むしろ単なる「史話」として通俗的に記述する――」

(正史でない史話としての断りを書く。原典は主に明治末に編纂が完成した暦年形式の住友の家史である「垂裕明鑑」で、その他は住友内部史料に基づいている。企画から刊行まで時間がないので、正史とせず「史話」と通俗的な内容とした。)

P004 **写真説明に「樹氷白き銅山峰の頂」**

(銅山峰の呼称があった。別子銅山の元の呼称は足谷銅山であった。)

- P005 **「石ヶ山丈より連なる山腹に空しく上下二線の路面を、――」**
(牛車道跡と上部鉄道敷跡の説明)
- P006 **「芽出度町」**
(草木の芽が出る様からの本来の意味の字である。目出度町は後の変化)
- P009 **写真説明「金庫の残骸」**
(その一部が現存している)
- P028 **「『別子立川、歓喜東当用舗内大略図』に、その間符口の結構が画かれ、向かって右、第一の柱に、天照皇大神、第二の柱に、八幡大菩薩、第三のそれに不動明王と書してあり、向かって左の柱、第一に春日大明神、第二に山神宮大山積大明神、第三に薬師如来と認めてある。」**
(三社託宣の神、鉾山の神、医薬・病氣平癒の仏の6つ)
- <開坑>
- P056 **立川銅山の峰続きで――露頭発見したという。――この辺は既に幕府の領地で支配も違うし、大木がしんしんとして屋なお暗いほど茂ってり、――尾根の絶頂より二三町、林の中を南に下った時、――露頭らしきものを見つけだした――**
- P058 **長兵衛が越えたといふ尾根（現在の銅山越え）のあたりは――**
(天領の露頭を見たのは、立川銅山側の露頭線を辿ってやせ尾根登って銅山峰に至り、露頭線沿いに南に下りて行ったと考える。そうすると最初に現在の大露頭に至る。大露頭の西には鉄くずの様な露頭がある。ツガザクラのDNA鑑定では固有種で、八ヶ岳のとは違う。(カラマツに付着してきたとの説があった)さらに土佐にツガザクラの南限が見つかっており、太古から銅山峰にはツガザクラが繁茂していた。そこは局地烈地で、大木は生えていなかった。銅山越の吊尾根は、銅山峰を露頭線が横断しており、植生がなじまず風化にさらされてつくられたと考えられる。緑が回復した今とあまり変わらない景観であった。請願書が幕府に提出されていて露頭はだれもが知っていたもので発見ではない。露頭線が谷で下刻された歓喜坑の谷に鉾脈の筋が出ていた。最初の出願者も歓喜坑の谷を採掘場所と決めて、何らかの印をつけていたと考える。長兵衛はそれを確認に行ったと考えられる。だから現在の銅山越えに出る登山道をそのまま長兵衛の足取りとして記述している。
発見記については、泉屋叢考^{そうごう}13が詳細に記述している。)
- P059 **二つ岳の山腰を南へ迂回し、西へ銅山川の谷を辿って――**
(銅山川の呼称は開坑後の名称で、調査に向かうときは伊予川である。後の銅山川と言うべき。)
- P060 **五里の国道を西して天満村に着くと、当夜は――翌朝早く早く土居へ出た。**
(川之江からの国道は土居に至っていて、国道から天満に枝道が延びていた。)

天満の庄屋にあいさつをするのは、既に別子山の銅山経営を念頭にして積み出し港の天満を考え、第一泉屋道を想定している。長兵衛の案内で七助が初見聞し、有望とのことで田向重右衛門らが再見分している。二度の見聞を一度にまとめて記述している。

以上のようにも考えられるが、天満村の3/4を納めていた下天満の庄屋の寺尾家は、江戸時代には幕領地大庄屋として宇摩郡の川之江、余木、山田井、下分、三角寺、新宮、具定西寒川、大町、豊田、瓜尻、五良野、野田、中村、藤原、天満、北野、両上野、浦山、別子山、津根山、平野山、小川山、及び新居郡の新須賀、東角野、西角野、立川山、大永山程川山、伊予郡の南神崎の各村々差配していた。第二泉屋道のために西条藩と天領の地替えをした新居郡の新須賀、東角野、西角野、立川山、大永山程川山も差配村となっている。新鉾脈の所在地の別子山が差配地であるために、政治的には川之江代官所へ代官の手代に新鉾脈調査の断りをした後に、実務的には現地を差配していた天満の庄屋に調査の断りのあいさつをするためら寄っている。)

P061 **おぼこ峠から険岨な阪を、^{りょうぶ}令法、さるすべり、黒文字、樺などの繁茂する林の中を――**

(庭木のサルスベリでなく、ヒメシャラ、ナツツバキの地方名がサルスベリ。樺はタケカンバの木か。タケカンバなら標高1500m以上での生育なので標高1300mでは低すぎると思う。)

P061 **現在の日浦から小足谷へあがる地点――密林は前面におおいかり、杉、松、檜、樟など千年の巨木が――**

(密林ではない。常緑広葉樹の樟は四国の平野部に生育し、高山には生育していない。数百年の杉が生えていたら木曾杉に相当する。土佐・大豊町の大杉、西条市今宮の大杉などが生えているが、神木として保護されて残った。我が国では城を建築するときに巨木は伐採されている。)

P084 **一行が峰近いところに、かねて長兵衛が見立てておいた露頭がこれだと指示された時は、――篝火のもと蜂の巣焼けをはっきりと見出し得たのである。**
(再見分だから歓喜坑の確証地点を目指している。)

P065 **異説も伝えられている。三島村の祇大夫が試掘する。金子村の源次郎が請願する。**

(別の人を試掘して請願しているので、別子の銅鉾床は周知のことであった。住友別子鉾史にはきちっと書いている。)

P076 **堀場(つぼ)の支柱や舗口の矢木に用いられる――**

(支柱工法は、宋から伝えられた。矢木は坑口に先が矢のように削られた棧木のことか。別のページに坑道内の矢木留木と出てくるので、矢木は天井用、留木は壁用か。矢木は尖板(やぎ)とも書く。現代の矢板に当たるなら、土砂

の崩落、水の浸水を防ぐために構築物の周囲などに打ち込む板状の杭。「舗口の矢木」とあるので、坑口の四つ留の柱の上に載せている横木の上に並べられている杭や柱の横に差し込んである杭である。）

P103～ **御村別君と称し、加禰古乃別君――龍古乃別君――**

（加禰古は、金属の古語で古代において鉱山経営をしていたことを意味する。龍古は、龍河で立川山の産土神である。音読みして別子^{べつし}の呼称となる。）

P106 **その石があまりに美しい光沢のあるところから、幾個が持ち帰って村の庄屋に贈った。**

（光沢のあるのは銅鉱石であるが、採鉱した鉱石。川に落ちていたのは露頭の焼けか、自然銅でなかったのか。光沢のある石は説明的である。）

P107 **渡海屋平左衛門――**

（渡海屋平左衛門が寄進の狛犬は、龍河神社の階段の中ほどに現存している。）

<稼業>

P119 小文字部分 **別子山中に蘭塔場を設けて年々その仏事は営み来つた。いまはそれらの墓碑は移されて角野村瑞応寺境内なる住友殉職者諸霊の塋域に祀られている。**

（蘭塔場とは両墓制による拝み墓である。埋め墓は円通寺墓地である。両墓制は上方に置いて色濃い風習である。）

P122 **この両村の境界というのがまた、永年にわたる面倒な問題で、立川山村では分水嶺の「御林札場」のある見通しが境界であると主張するし、別子山村では同村百姓の唱える「峰水流」が古来の境界だと主張して、まだその解決がついていなかった。**

（銅山峰は稜線部がなだらかで、一般的な分水嶺の境と言い難い様子である。）

P128 **真鍋弥一右衛門も没落して京都糸割にその後を譲って――**

（京都糸割符の奉納した石灯籠が一宮神社の参道に現存している。）

P139 **住友家が元禄十五年以降、――新道は――西赤石、上兜の両山の間を縫える――石ヶ山丈に出て、そこより立川山渡瀬に下り、新居浜浦に到るもので、――口屋を建てた。**

（従来、第二泉屋道と呼ばれていたルートの記述である。今では新居浜浦に出る申請ルートで、使用したのは第三泉屋道との認識に至っている。

石ヶ休場が特定できないので石ヶ山丈と読み替えている。石ヶ休場は道中につくった石積みに荷物を預けて立ったまま休憩する所で、何箇所もあった。明治35年製作の住友金属鉱山の地図に、清滝と川又の間に「石ヶ休」の地名がある。）

P191 **別子舗方の懇請をうけ、讃岐の産める近代の偉人久米栄左衛門翁が、――**

（讃岐・坂出の塩田開発を私財を投入して尽力した久米通賢で、測量、兵法な

どを学び、伊能忠敬の日本地図作成に協力している。軍艦の設計もしている。
江戸時代の科学者兼技術者。)

<更新>

P286 **明治六年には、銅山の施設として小足谷小学校を開設して、――**

(明治6年の私立足谷小学校の開設は風呂屋谷である。明治19年には小足谷に尋常小学校を開校した。足谷尋常小学校の建設は明治22年である。)

P322 **住友家最初の海外留学生として、別子銅山より雇員鹽野門之助、増田好蔵の
二人を仏蘭西に派遣することにした。**

(塩野は、目論見書が完全に翻訳できなかった悔しさを動機として留学を希望した。増田は6ヶ月でリタイヤする。)

P339 **嘉永年間に時の銅山支配人清水惣右衛門が開発した所で、開拓者の名をとって
初め惣右衛門新田と称し、後ちに略して惣開と呼ばれていた。**

(惣開きの地名は、嘉永年間よりも90年前の宝暦14年に既にあった。惣開之記碑の碑文で誤解している。)

<発展>

P393 **新に鹽浜跡の海面埋め立てを出願――**

(かつて惣開には、名古屋呂浜という塩田が松林の隣にあった。早くに廃田となり田畑になった。旧惣開小学校は浜堤と浜堤の間の田圃を埋め立てて用地とした。小学校の北側に惣開製錬所が建設されたので、その浜堤の間が名古屋呂浜塩田であったと考えられる。名古屋とは海に突出したところの意味。)

P400 **地方のため円満解決を望んで奔走せる代議士(藤田氏)もね――**

(代議士の藤田とは、多喜浜塩田の藤田達芳。)

P406 **一箇年の銅山の収入約百余万円に過ぎなかった時代において、この計画実行のため
に新製錬所建設費として八十万円を支出する予算を可決――**

(日清戦争後の物価高騰で建設総額は170万円余りとなった。年収の約2倍。)

P408 小文字部分 **四阪島は愛媛県越智郡宮窪村大字友浦に属し、――三ノ島、家ノ
島、明神島、鼠島の四つの小島より成れるため四阪島と称し、付近四個村の共有に
属し、古来燧灘中の漁場に利用され――**

(四阪島諸島は、三ノ島、家ノ島、明神島、鼠島、そして梶島の5島で構成されている。後には、三ノ島、家ノ島が陸続きになり4島となって四阪島と称する場合も出てくる。四個村の共有から海原に突出した境界杭そのものだから共有としたのである。阪はサカイである。四つの村の境の島となる。阪の元字は坂で、土に反は死んで土に葬られて土に帰るとなるので、土が盛り上がるコザト扁となる。)

- P420 **生子山麓大山積神社畔に五万の大衆を容るべき大グラウンド――。**
(山根陸上競技場は、建設当初の収容力は3万人であった。その後、整美拡張して6万人の収容力となる。)
- P423 **大正元年七月より端出場に新設せる水力発電所は、――。**
(大正時代は、大正元年7月30日から大正15年12月25日まで。発電所竣工は5月、使用認可は7月24日。正しい表記は、明治45年7月より。)
- P476 **鉱業所にとってかようなる契約は、実に我が国はおろか世界にもその例を見ざる過重の負担であり――。**
(鉱量制限、季節的操業規制は京都議定書を100年前に先取りしたものである。煙害を克服しないと生産増は不可能。)
- P534 **大阪における祝祭は――大山積大神、金山彦大神、金山媛大神、大地主大神、住吉大神の諸神をここに勧請し奉って――。**
(大山積大神は鉱山の神様、金山彦大神、金山媛大神は製錬の神様、^{おおことぬし}大地主大神は土地の神様、住吉大神は海運の神様。なお、新居浜での祝祭は大山積神社で行った。)

蘭 塔 場

旧別子に元禄7年の大火災で亡くなった元締・杉本助七ら132人を祀る蘭塔場がある。

日本民族の死者の祀り方として、死体を埋葬する一次墓地と、靈魂の供養をする二次墓地とを別々につくる。死者を葬った墓でその霊を祀らず、別の場所に霊のみを移し迎えて祀る。死者を葬った墓を埋め墓、身墓、山墓、野辺、三昧、墓地と呼びけがれ多いものとする。別に清らかな所に霊を迎えて祀る墓を詣り墓、清め墓、精進墓、引き墓、空墓所(からむしょ)、ラントウバと呼ぶ。このように二重に墓をつくることを両墓制という。近畿地方に最も濃厚な分布が見られ、中部、関東で多く、そこから東西に離れる東北、北陸、中国、四国では分布が疎になる。

ラントウバは、卵塔場、乱塔場とも書く。

両墓制の分布が疎にある四国の中で、旧別子に蘭塔場があるのは、別子銅山の関係で上方の民俗によるものと考えられる。

山岳霊場に死者供養や墓の痕跡がある。山麓に墓地がある山は霊場化する。死者の肉体は朽ちても霊は山頂に昇って行って、そこに鎮まる。山麓は埋め墓、山上は詣り墓という図式ができる。京都の鳥辺野と東山の関係もこれである。鳥辺野は埋葬、火葬、風葬のおこなわれたところ、東山の霊山はその靈魂の供養がおこなわれる詣り墓であった。修験道の山では谷が葬場、山上が供養所だったために、立山では地獄谷と浄土山ができた。

旧別子の蘭塔場と円通寺跡地の墓地の関係も山上と麓・谷の関係に見えてくる。

近畿地方では、葛城、吉野、熊野、大峰、室生、長谷、槇尾、生駒、笠置、比叡、愛宕、鞍馬などの霊山霊場である。しかし、高野山を除いて他の霊山霊場は、菩提所としての信仰を失った。

先祖祭祀の場所は高野山に限らず、善光寺、大谷本廟、などが代表である。納骨霊場としては、浅草寺、成田山、四天王寺などが有名である。

三 社 託 宣

- 八幡大菩薩** 鉄丸ヲ食スト雖モ、心汚ノ人ノ物ヲ受ケズ、銅焰ニ坐スト雖モ、心濁ノ人ノ処ニ至ラズ。
- 天照太神宮** 謀計シテ眼前ノ利潤ヲ為スト雖モ、必ズ神明ノ罰当ル、正直ナラバ一旦依怙(たより)ニ非ズト雖モ、終ニハ日月ノ憐ヲ蒙ル。
- 春日大明神** 千日注連(しめなわ)ヲ曳クト雖モ、邪見ノ家ニ至ラズ、重服深厚タリト雖モ(重い忌みがあっても)慈悲ノ室ニ赴クベシ。

以上の文が漢文で書かれていますが、その意味は次のようになります。

- 八幡大菩薩のお告げは、たとえ鉄球のような堅い物を食べても、心の汚れた人の物を受けない。たとえ銅の焰の上に座っても、心の汚れた人の処に行かない。
- 天照太神宮は、いろいろとたくらんで目の前の利益を得たとしても、必ず神明の罰が当たる。正直であれば一旦不利になっても、最後には日月の憐みが得られる。
- 春日大明神は、長らく注連をはって神聖な処としていても、そこにいる人の心がまがっておれば行かない。重い忌のある家でも、慈悲の心を持った人がおれば、その家に訪れます。